

## 目次

寄稿: アメリカでのTwo-Body (Dual Career) Problem (小島 武仁)	1-2	連載: 日米大学比較 —個人的な体験— (2) (山田 澄生)	4
寄稿: 私の米国生活 (阿部 康人)	3-4	連載: 発展途上国への支援。農業?保健?いや、ITでしょ! (前編) (狩野 剛)	5-6

## 寄稿: アメリカでのTwo-Body (Dual Career) Problem

Stanford University  
小島 武仁

まずは自己紹介を少しします。私はアメリカのスタンフォード大学の経済学部で研究・教育をしています。2003年から2008年にかけて、同じくアメリカのハーバード大学に留学して、そこで博士号をとってからそのままアメリカで就職しました。というわけで、このニュースレターのテーマである留学そのものはちょっと昔のことになってしまいました。でも今回は編集部から、留学からその後にかけてのことも書いて良いという承諾をいただきました。

さて、今回のテーマはtwo-body problem=「2体問題」です。といっても、古典力学で出てくる天体の運動とかの話ではありません。これは夫婦(同性婚など伝統的でない関係も含みます)の両方が仕事を持っているカップルの就職活動の話です。どの業界でも多かれ少なかれあるでしょうが、大学に属する学者が就職活動する時には、配偶者などパートナーのキャリアとの調整が重要になります。スタンフォードのグループが行ったあるアンケートによれば、アメリカの学者のうち、だいたい3分の1くらいはカップルの両方もが学者という比率らしいです。我が家もこのパターンで、私は経済学者、妻は政治学者で、このtwo-body problemは私たち夫婦が大学院生の頃からずっと我が家の懸案になっています。というわけで、今回は私のtwo-body problemの体験談を書いてみます。

### カップルの就職活動の流れ

アメリカでアカデミックカップルが仕事を一緒に探す時には、採用する大学側は一緒に採用するように努力します。日本の感覚からすると「夫は夫、妻は妻」で、採用側が夫婦関係を考慮するというのは恐らく珍しいのではないかと思います。アメリカではごく普通に行われています。大きな理由のひとつは夫婦共働きのカップル、特にアカデミアにいるカップルが大変多いことだろうと思います。加えてアメリカでは、多くの大学はド田舎にポツンとあることが多く、東京なら夫婦がそれぞれ都内で別の仕事を探すところ

が、アメリカではそういうわけには行かないという事情もありそうです。そもそもアメリカは広大なのでそれぞれ別の大学に勤めるとお互い行き来に10時間以上かかることもあります。

私達の場合は、私の方が妻よりも数年先に卒業・就職していました。最初のファカルティポジションだったスタンフォードは西海岸、彼女が在籍していたハーバードは東海岸でかなり離れていたのですが、最初はなるべく研究環境の良いところに行ったほうが良いだろうということで、あえて遠距離生活をやりました。そして、妻の方が博士号を取って卒業することになってから、二人そろって就職活動をするようになりました。



妻がポスドクをしていたプリンストン大にて。

さて、具体的な就活の方法はどんなかという、驚くほどローテクで泥臭いものでした。とにかくまずは興味のある大学にメールをたくさん書いて、雇ってくれないかお伺いを立てるところから始めました。皆さんもご存知かもしれませんが、学者の世界は狭くて、就職先になりそうな大学には大抵一人や二人は知り合いがいますから、彼らに連絡を取るわけです。それから、大学院の時の指導教官や友達に、どこか空きポジションが無いかを問い合わせる

こともしました。さっきも書いたとおり学者の世界は随分狭いので、こういう個人的なネットワークが大事な気がします。

さて、我々の場合、最初のレスポンスの段階で結構苦戦しました。というのも、コンタクトした大学によってはそもそもポジションが無いが多かったのです。特に我々の場合は経済学部(私)と政治学部(妻)の両方にポジションが必要なので、なかなかそういう都合の良い大学は無いわけです。幾つかの大学は経済学部と政治学部とが相談して選考してくれることになりましたが、この段階ですでにかなりの大学から門前払いを食ってしまったという感じでした。

この時の経験からいくつかわかったことがあります。ひとつ目は、夫婦の就職活動はロングタームの問題になることを覚悟すべし、ということです。コンタクトした大学の幾つかは、今年は予算が無いので無理だけど来年だったらどうか、とか、今進行中の採用があつて(それも経済学部と他の学部でカップルを採用する話でした)その話がかもしも採用に至らなかったら予算がフリーになるから少し待ってくれないかとか、そういう採用側の事情がいろいろあるからです。特に社会科学系は自然科学系と比べてそもそも採用ポジションの数が少ないようです(経済学部は社会科学の中ではかなり恵まれています)ので、「今年何が何でも決めるぞ!」とか思っていると、思ったより反応が悪くてガッカリすることも多いのではないかと思います。

もう一つ重要なことは、いろいろな就職先を可能性として考えることです。例えば我々の場合は経済学部と政治学部のポジションを1つずつ、というのを目標にしていたのですが、経済学者や政治学者を雇う学部・スクールは他にもいろいろあります。例えばビジネススクールや公共政策大学院などは典型的な就職先です。それから伝統的な学部ではなくて、研究所とかに意外に採用の口があつたりします。私達の場合は、妻の分析手法が経済学者と非常に近いので、ふたりとも経済学部で採用するのはどうかと、採用側から提案されることも多かったです。採用側としても異なる学部で調整する必要がないためか、二人とも同じ経済学部で採用する場合の方が、話がよくなるようでした。最終的にオファーをくれた大学も、二人とも経済学部とか、妻の方は研究所のポジションという場合が多かったです。ですから、皆さんも色々可能性を探ってみるのが良いと思います。

ともかく、興味を持ってもらえた場合にはセミナー(研究発表)に呼んでもらい、そこで気に入ってもらえれば仕事のオファーをもらえます。この辺は普通の就活と大体同じようなものではないかと思えます。



先日第一子が生まれたので、今後の就職活動はtwo-bodyならぬthree-body problemになります。

## オファーを貰ってから勝負どころ!

さて、めでたくオファーをもらっても、それで就職活動が終わるわけではありません。その後には条件を詰める交渉が待っているからです。日本の大学ではあまり交渉の余地はないという話もありますが、アメリカの場合には雇用条件がかなりフレキシブルなので、ここでの交渉でかなり条件が変わってくることになります。

交渉できる項目はいろいろあります。交渉の典型的な項目はテニユア付きかどうか、職階(教授なのか准教授なのか)、年俸、研究費、福利厚生(住居の補助など)、担当授業の数など。私は交渉事が苦手なので少ししか要求しませんでした。それでも交渉した先は大抵、まずまず気軽に各種の条件を改善してくれました。

そうそう、忘れてはいけないのは、自分のhome institutionとの交渉です。私の場合も、いろいろな大学とコンタクトを取りながら、スタンフォードとも残留のための交渉をしていました。私はいまだに日本の伝統的価値観(?)を持っているタイプで、他の大学と交渉しているのをあんまりおっぴらにスタンフォードに言うのが、最初は居心地が良くなかったです。でもここはぐっと我慢して少しでも良い条件で残れるように交渉しましょう。アメリカの大学は教員の移動が激しいですから、大抵は快く受け入れてくれます。

結局我々の場合は、スタンフォードがいろいろと考えて好条件を提示してくれたので、とりあえずは残ることにしました。私の方は今まで通り経済学部、妻は新たに政治学部の講師として働くことになりました(私の方のお給料や研究費もアップしてくれました:-)。

…というのが2年ほど前のことで、現在また就職活動を始めています。妻のポジションは今のところ期限付きの講師なので、そろそろテニユアトラックのポジションを探そうというわけです。というわけで、さっきも書いた通り、two-body problemは時間がかかります。正直言って決して楽ではありませんが、私の指導教官はよくThe iron law of marriage is that you can never be happier than your spouse. と言っていました。最近これって本当にそうだなあと実感しています。ちなみにその指導教官と共著でカップルの就職活動を分析する論文を書いたので、一応仕事に役立っていると言えないことも無いかもしれません。

この記事を読んでいる皆さんも、将来two-body problemに直面する可能性は結構あるのではないかと思います。焦らず粘り強く頑張ってください。ご幸運を!



小島 武仁  
スタンフォード大学経済学部准教授  
<https://sites.google.com/site/fuhitokojimaconomics/>

## 寄稿: 私の米国生活

私は2010年～2015年まで南カリフォルニア大学コミュニケーション学部博士課程(アネンバーグスクール)に留学しました(2015年にコミュニケーション学博士号取得)。2015年4月から京都にある同志社大学という私立大学で助教(有期)として研究/教育活動に従事しています。この原稿では、これから研究目的で留学をしようと考えている方を読者として想定し、留学時代で得た知見について書いていこうと思います。

## 米国全体が君のキャンパスなんだ

とある米国の私立大学の先生から留学直前にいただいた言葉がありました。先生に「南カリフォルニア大学アネンバーグスクールに進学することにしました!」とご報告すると、その先生は「君の指導教官にはいったい誰になるのか、僕にはわからないなあ」と少し首を傾げたのちに、このように言われました。

「いいかい、君が留学するのはアネンバーグじゃない。ロサンゼルスでもない。米国全体が君のキャンパスなんだ。」

その後、その先生はご自身の博士課程時代の体験談を話してくださいました。先生自身、博士課程時代にもっとも指導を仰いだのは指導教官ではなく、他の大学に勤務している先生であったということ。自分が所属している大学の指導教官には、ほぼサインだけいただいて博士号を取得したということ。「自分が研究者として修行する最適な環境を、自分の意志と行動力をもって設計せよ」---先生のメッセージを私はこのように解釈しました。

## フットワークの軽さの重要性

留学の目標といいますと、入学した大学で学位を取得することだと考える方もいらっしゃるかもしれませんが。学位を得ることに専念するために行動範囲をキャンパス内に限定して、毎日ひたすら研究に没頭するのもよいと思いますが、私は当初から(研究者に限定せず)専門が異なる人を含めたさまざまな人との出会いを大切にするように心がけました。

在米日本人に限定しても、キャンパス内の専門の異なる日本人留学生はもちろんのこと(そもそもコミュニケーション学を専門としている日本人留学生の数は極めて少なかったのですが)、南カリフォルニア地域にある大学(UCLA, ペPPERDAINE大学, カリフォルニア工科大学など)に所属している日本人留学生/研究生、日本の出身大学の現地同窓会、妻のアルバイト先の方々(私のビザの関係で妻はアルバイトができました)、ロサンゼルスで仕事されている在米日本人の方々の集いなどなど、いろんな方と時間を一緒にさせていただきました。

こういう一つ一つのご縁は、私と妻の留学生活に大きな豊かさをもたらしてくれました。とりわけ、生活情報はキャンパス外の出会いから得ることが多かった印象があります。学位を取得するためにも衣食住の生活情報を欠かすことはできません。「■■■の治安は最近あまりよろしくないから■■■周辺には住まない方がいい」

車をどこで購入すべきか」といった快適な留学生活をおくるうえで欠かすことの出来ない情報から(ロサンゼルスは車社会なので車がないと大変です)、「どこのお店で売っている●●がオススメ」「△△の〇〇がお買い得!」といった生活密着型の情報まで。さまざまな出会いを通して入ってくる生活情報によって、たいへん助けられました。

事実、このようなさまざまな人との出会いは、結果として私の研究にも大きなプラスとなりました。異業種の方との対話がきっかけとなり、新しい研究テーマが生まれて論文として結実したものもありました(これは私の専門分野がコミュニケーション学だからということも関係しているのかもしれませんが)。加えて、さまざまな人との出会いに慣れてくると、キャンパス外の研究者にもコンタクトをとるのが億劫ではなくなってきます(フットワークが軽くなるとでも言うのでしょうか)。自分の博士論文の研究テーマが決まってからは、まったくご縁のなかった先生にもメールで問い合わせをしてアドバイスをいただきました。もちろん、メールが返って来なかったケースもありますが、極めて有益なアドバイスをいただいたこともありました。また、そういったやり取りがもたらした、その分野の権威とも言えるような先生とご縁が生まれたこともありました。

ロサンゼルスで私が得た教訓は、(ネットワークづくりではない)研究目的の留学であっても「何を知っているかよりも誰を知っているか」ということが非常に重要になってくるということでした。そこで何よりも必要となって来るのが、フットワークの軽さという行動力です。よく人を形容する際に「あの人は100人に1人の逸材だ!」などと言うことがありますが、「100人に1人の逸材」に会うためには100人に会いにいくだけの行動力が必要になってきます。私が留学で得たことというのは、記号としての学位などよりも、こういった体験を通して得た行動力だったのかもしれない。

## 今も「留学モード」

現在、私は京都で生活しております。知り合いの少ない京都ではロサンゼルス同様、フットワークを重視して留学時代のような気持ちで一から頑張りたいと思っています。京都に一年住んでみて思うことは、京都もロサンゼルスと似ている点があるということ。ロサンゼルスと同様、京都も誰も知らないといもできない場所です。京都での生活を自宅と職場の往復で終わらせることも可能ですが



阿部 康人  
同志社大学社会学部メディア学科助教  
南カリフォルニア大学コミュニケーション学博士

(いわゆる、「家庭」と「職場」はあるけれど、「社会」がない状態とでも言いましょうか)、人のご縁を大切にしていけば、京都ではほかの日本の都市ではできないような出会いが可能となります。助教として研究室に閉じこもって研究成果をひたすらあげること

に専念することも大切ですが、せっかく京都にいるのだから京都にいる間は京都でのご縁も大切にしていけたらと考えています。この点、帰国はしたものの今も「留学モード」で楽しくやっている毎日です。

学習院大学  
山田 澄生

## 連載: 日米大学比較 — 個人的な体験 — (2)

前回、留学の心得および留学に関する気持ちの持ち方についてお話ししましたが、今回はアメリカにおいて大学院生になるということに関して、すこしを絞ってみます。

最近、優秀な高校生が国内での大学受験を傍目に欧米の学部へ進学するシナリオが新聞やテレビなどで取り上げられていますが、まるでグッチをエルメスで置き換えるように欧米の大学に対する表層的なブランド志向が先行しているようにみえるのは私だけでしょうか。やや脱線しますが、「何者」(朝井リョウ)という東京の私立大生の就職活動を題材にした小説が少し前に話題になり、私も私大の一教員として興味深く読みました。それと前後して「意識高い系」という、社会的な状況判断に長けた自己アピールの上手な、就活におけるある種の賢さを意味する言葉が出てきました。英語では「意識高い系」は“overachieving”または“overachiever”に対応するかと思います。アメリカのいわゆる一流(私立)大学の学部に入學するには、このoverachievingな高校生であることが、もちろん決して十分ではありませんが、必要条件です。数年前、スタンフォード大学のある教授にスタンフォードの学部に入學するための評価基準はあなたから見て実力主義(meritocratic)と思うかと私が訊いたところ、「いや違う」とはっきりと否定していました。これはアメリカの大学教員の持つ一流(私立)大学の学部生全般に対する印象を代表しているかと思えます。つまりアメリカのundergraduateの入學基準は、学力に関する限り実力主義ではないのです。結果的には、我々日本人が新聞で見聞きするようなアメリカの有名(私立)大学への入學に関しては、社会の上位中産階級以上のoverachievingな学生が、そうでない(もしかしたら学力が高い)学生に対して優位になっていることは否めません。この状況の是非をここで議論するつもりはありませんし、また一方で学部留学に多くのメリットがあることは疑いの余地はありませんが、私が上で述べた「表層的なブランド志向」の意味は、この辺の事情をすこし鑑みてほしいということにあります。

さて本題はここからです。この話には続きがあって、さきほどのスタンフォードの教授は「でも大学院はmeritocracyだ」と断言していました。医学部、法学部、MBA等を含むプロフェッショナル・スクールを除けば、一般的に学費、生活費がすべて支給されるシステムのもとに経済的な格差が影響しえない、かつ世界中から学力の高い大学生が応募するアメリカの博士課程大学院の選考に関して、私もそう思います。現在日本の大学の学部で日々勉学の研鑽を積んでおられる学生さんには、この事実は朗報であると感じていただきたい。なぜなら大学院に入學するためには、アメリカの学部への留学とは異なり、上に述べた意味で「意識高い

系」である必要はないのです。逆に、日本から向学心に燃えた皆さん一人一人が、その「学問への高い志」を、入學を希望する大学院の教員に伝えることができたなら、それ以上に効果的なアピールはないのです。ただし高い志と多くの専門知識は同義ではありません。アメリカはこわいところだからもう少し勉強して知識を身につけてから行ったらいいだろうと考える学部生も多いかと想像しますが、私はそうは思いません。先方(大学院のadmission committee)は、すでに専門に一家言を持つ「老獪な若者」ではなく、素直で勢いのある“young blood”を探しています。制度的にも大学院は修士号と博士号がセットになっているところが多いので、たとえば日本の修士号をもっていても、留学先の大学院で最初(先方の修士号に相当する部分)からプログラムを履修させられることが多いようです。さらに続けると、一般に大学院とくに博士課程はある種の“intellectual enterprise”ですが、教員の意識という視点から見るとヨーロッパおよび日本は伝統的な教養主義から“intellectual”に重点が、一方でアメリカの大学院はその先進性への執着から“enterprise”により重点が置かれるように思われます。この意味からも、私は現在学部生のみなさんが「アメリカはこわいところ」と考えることには、あえて注意喚起をうながしたいと思います。

前回、大海を前にして冒険する情熱をもった皆さん一人一人は、雁風呂の逸話にでてくる木片を銜えた雁であると言いました。海の上を飛ぶことに疲れたとき水面で自分を支えてくれる木片が象徴するものは、皆さんの「若さ」に他なりません。enterprisingな精神を持ち、若さと志に支えられて冒険に臨んでいる人はそれだけで美しいものです。アメリカの大学院において、そのまぶしいほどの美しさに魅せられて、多くの人がこころから応援してくれるでしょう。そしてそれはアメリカの大学院における実力主義(meritocracy)の定義にほかなりません。



山田 澄生  
学習院大学理学部数学科 教授  
スタンフォード大学数学科博士課程卒業

こんにちは。初めて投稿させていただきます。ミシガン大学情報学大学院(University of Michigan, School of Information)に「ITの途上国支援への活用(ICT for Development)」を研究テーマに昨秋よりPhD留学をしています。これまでは、新卒でITエンジニアとして働いた後、国際協力機構(JICA)に転職し、東京本部勤務を経てバングラデシュに駐在。その後、「ITの途上国支援への活用」という専門性を高めるために、留学を決意しました。

おそらく読者の方は、留学のみならず海外での仕事などについて興味を持っている方も多いかと思しますので、本投稿では2回に分けて、まず初回は留学に至るまでの経緯と海外(途上国)生活、そしてなかなか見えにくい国際協力の世界を、そして今回は留学先での研究等の話を書いてみようと思います。

## 1. ITとの出会い

高校卒業まで過ごした茨城で迎えた大学受験時では、「都会に出たい」「なんとなく人気なので情報工学」といった程度の動機で進学したため、あまり授業にも出ずにテニスやバイトをして、いまいちな(典型的な?)大学生活を送っていました。転職が訪れたのが大学3年の時でした。当時は楽天やライブドアの頭頭などに代表されるITバブルだったこともあり、急に「ITベンチャーの社長になってひと旗あげたい!」と思い立ち、技術もないのに渋谷のベンチャー企業(と書くと聞こえはいいですが、実際は、出会い系サイト運営会社)でのWebプログラマーのインターンに挑戦することにしました。今思うと、あの技術力でよく雇ってくれたなと思いますが、このインターンでの、お金をもらいながらビジネス経験とプログラム技術を学んでアウトプットを出すという環境が本当に楽しく、「これが仕事をするということか!」と、とにかく刺激的な経験でした。そのため、大学は最低単位を揃えることを目指し、他の時間はインターン先に入り浸っていました。卒業後は、ベンチャー企業だけでなく大手も見てみたいという思いもあり、大手のIT企業にシステムエンジニアとして就職することになりました。

## 2. 途上国との出会い

国際協力に携わる人が、きっかけに挙げる例として「子供の頃に見た映像が衝撃的で・・・」というのがありますが、私の場合は大学卒業までは、(情けないことですが)途上国にはほとんど興味はありませんでした。そんな中、今でも自分の人生を大きく変えてしまったと思っているのが、大学院2年の夏休みに初めての海外一人旅で訪れたミャンマーでした。ミャンマーを選んだ理由は、周りで誰も行ったことがなくて、物価が安そうだったからです。その頃のミャンマーは軍事政権下で(スーチーさんも自宅軟禁中)、あまり期待をせずにバックパック背負って訪問したのですが、人の笑顔、素朴さ、圧倒的な親切さなどに、まさに雷に打たれるほど感動し、帰る頃には「いつかこの人たちと一緒に仕事をしたい!」と考えようになっていました。旅行当時はすでにIT企業に就職が決まっていたのですが、帰りの飛行機の中で「このまま就職していいのかな。」と非常に悶々としたのをよく覚えています。



人生観が変わってしまったミャンマー旅行

## 3. ITと途上国支援が結びつく

そのまま内定先に就職することに少々悩みはしたものの、ITが非常に好きであったこともあり(今も大好き)、途上国は趣味の対象と整理し、そのままIT企業に就職をしました。ITエンジニア時代は証券システムの開発(株のトレーディングシステム)を行い、仕事自体は面白く、中国オフショア開発やプロジェクトマネジメントなど学びの多い職場でした。その一方で、非常に激務な職場で、終電やタクシー帰りが続いた時に「なんで自分は金持ち(証券会社の顧客)を更に金持ちにするために仕事をしているのだろう。」と考えるようになりました。いわゆる社会人3年目の壁というやつですね。

その当時は休暇を使ってバックパッカーとして各国を回っていて、途上国の文化や人々には相変わらず惹かれたものの、途上国とITというのは結びつかない全く別のものという認識でした。そんな頃、ふとネット上で見つけたのが、JICAの「フィリピンIT人材育成プロジェクト」でした。それを見た時は、「おお!そうか!ITを使っても国際貢献ができるのか!」と ITと途上国の接点が初めて見付き、興奮して寝れなかったのを覚えています。そしてその思いを止めることができず、社会人4年目にして、JICAに転職することになりました。ちなみに、JICAは国際協力機構という独立行政法人の一つで、日本政府として途上国政府に対して国際協力を実施する機関のことで、インフラ支援、技術支援、そして青年海外協力隊などのボランティア派遣を行っています。途上国支援=NGOというイメージがあるためか、時々「JICAはNGOですか?」と聞かれるのですが、NGO(非政府組織)ではなく、むしろ真逆の政府組織です(ママ知識)。

## 4. JICAでの業務とバングラデシュ駐在

転職後はまず、青年海外協力隊の事務局でアフリカを担当しました。そして2年後に社会基盤(インフラ)の担当部署でITを使った途上国支援を行う部署に異動になり、ようやくやりたかった仕事を担当することができ、多くのプロジェクトに関わらせていただくことができました。

その後2012年から2015年まで駐在したバングラデシュでは、ITと都市開発の担当としてITインフラからゴミ処理改善まで、

様々なプロジェクトに関わらせていただきました。なかなか外からは見えにくいのですが、JICAの駐在員としての仕事の関わり方は、先方政府と一緒にプロジェクト企画・管理することが主な業務です。若手でも先方政府の幹部(主に事務次官や局長)と国づくりについて直接議論を行うことができる環境は、非常にダイナミックでやりがいのある仕事でした。私は省庁や国際機関の集まる首都ダッカに滞在していたのですが、地方のプロジェクト現場や、地方で活躍するNGOや青年海外協力隊の活動現場を訪れたり話を聞いたりすることも、国際協力に携わる人間として非常に面白く、刺激的でした。



日本の支援で導入したゴミ収集車

そして何より、途上国で働くことの最大の醍醐味は、発展の熱気を肌で感じれる点です。日本ではもう2度と経験できない国の急激な成長を、まさに当事者として経験することができます。日々新しいビルや建物が立ち、道路や水道の新設工事で激しい渋滞が

発生し・・・など、まさに発展の息吹を感じることができます。おそらく日本の高度経済成長期もこのように国として一種の興奮状態(ランナーズ・ハイ)にあったため、父親世代などは残業厭わず働き続けたんだろうと感じたりもしました。

その一方で、バングラデシュでの生活に関しては正直なところ不便が多く、衛生環境(水・空気)が悪いせいか、体調を崩すことも多かったです。その苦勞を分かち合えるからか、日本人の関係は非常に良好で、民間企業・大使館・NGO・国際機関などの人とも所属組織によらない非常にフラットで、家族ぐるみの濃いお付き合いを楽しむことができました。イスラム教国であるため、あまり外でお酒が飲めず、頻繁に誰かの家に集まっては食事会や飲み会をしていたのも、いい思い出です。

今回の投稿では、(ようやく?)本題である「ITと途上国支援」という留学先での研究テーマについて、そしてあまり知られていない情報学大学院で行われている教育・研究について書いてみたいと思います。



狩野 剛  
ミシガン大学情報学大学院博士課程1年  
University of Michigan, School of Information, PhD Student  
<http://tsuyoshi-kano.com/>

## 米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

### 【ニュースレター編集部】

石原 圭祐    高野 陽平    山田 亜紀  
辻井 快      佐藤 拓磨    松島 和洋

[newsletter@gakuiryugaku.net](mailto:newsletter@gakuiryugaku.net)

**執筆者を募集中!**

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動(留学説明会、メンタープログラム)に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。

<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

## 編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

春は僕にとっては忙しい季節です。植物学を志す者として、花のある春はフィールドで採集(花がないと種の同定が不可能なものが山ほどあります)、同じく花が必要という理由からTAをしている授業(Angiosperm Systematics)も春学期です。そして、これらをことのほか難しくしているのが花粉症です。花に囲まれていると楽しい反面、鼻が取れそうです。春が終わって欲しいような欲しくないような。複雑な今日この頃です。(辻井)

数週間前にディフェンスを終え、余韻に浸る間もなく次の研究生生活に向けセットアップをしています。編集部の石原さんと同じくドイツでのポスドクですが、生活習慣や言葉の壁だけではなく、研究所と大学の違いという別の意味での(研究)文化の壁も感じています。とは言え違う文化に飛び込むのはやはり楽しいもので、(相変わらず?)異文化の食の開拓と研究を楽しんでいます。(高野)

ケンブリッジ大学の各寮では時折for-

mal hallと呼ばれる晩餐会が催されるのですが、その食前と食後にラテン語で聖書の一節がお祈りとして読まれます。先日、奨学金を貰っている関係でこのお祈りの朗読担当になったのですが、その伝統的なイメージとは裏腹に、お祈りの英訳と発音法が記されたpdfファイルに加え、発音指導の音声ファイルが事前にeメールで送付されてきました。表層的には同じ伝統でも、その実態は急速に時代に適応しているようです。(松島)